

フィールドに行こう ― 臥蛇島渡島に想う ―

福元しげ子

〒 890-0065 鹿児島市郡元 1-21-30 鹿児島大学総合研究博物館

■ はじめに

アリ類調査の一環で三島村臥蛇島に渡る機会を2度得ることができたので、その時のことを記す。

臥蛇島は南西諸島トカラ列島の北部に位置し、長径約3 km、短径2 kmの火山島で、島の周囲は断崖絶壁に覆われ起伏が激しく平坦地が少ない地形をもつ。40年前の1970年7月に最後の住民が島を離れて以来、無人島になっている。

この島は鹿児島大学理学部南西島弧地震火山観測所の観測点となっており、地震計のメンテナンスのための渡島を機に「臥蛇島調査団」として結成されたメンバーの一員となることとなった。同行のメンバーには村落の見取り図を携えた学生さん、火山学、地震学専門の面々がおられた。

なお、この島に渡る際には十島村役場への「入島届け」、昆虫の採取に関しては「昆虫採取及び捕獲に関する協議書」の届けが必要となる。

■ 1回目の渡島 (2011年5月17日)

この島は浅瀬が多いので小型の漁船で接岸するしかない。前日深夜に鹿児島港を出航し、17日6時30分口之島港下船。民宿で朝食をとり、7時30分漁船で約1時間30分で岩肌あらわな島影が現れた。

船着き場の後は断崖で、荷揚げを行う索道小屋のブロックが集落の目印となった。機材の荷下ろしは全員で行った。崖の上にある集落跡までの50-60メートルの運搬作業は、島で生活することの厳しさを物語っていた。

調査団のまとめ役の説明で、私の調査にかけられる時間は調査ポイントの選択を含めて約4時間だった。無線機をあてがわれ、単独行動となった。

島を巡る道路跡は所々岩肌がむきだしになって大きな岩がころがっていた。竹がおおいかぶさったところを突き進むのはやはりドキドキした。竹やぶの奥がガサガサと音がしたかと思うやいなや、気づくとはるか離れた谷底に走り抜けたヤギ2頭がこちらを見ていた。後で知ったのだが、雨風もさることながら無人となった今では、離島の際に放したヤギやシカの食害がひどいことだった。

数百メートル進んだ時点で早めにサンプリングの場所を決めなくてはと思い、スタート地点に遠からず、海に面しており緊急時を考慮してもここでよからうという畑の跡らしき地点を調査地として決めた。ただちにアリ採集をスタートさせたのだが、何とも石ころだらけのところであった。ペイトサンプリング、マニュアルサンプリング、土壌サンプリングともぶっつけ本番で思いのほか時間がどんどん過ぎてゆき、心臓がバクバク鳴っているのが自分にも聞こえてきた。スコップが石にあたる音だけがむなしく響いた。空腹を感じる間もなかった。調査の進捗状況を問うコールがあった。いつ帰りを促すコールが鳴りはしないかが気になった。調査を終えたほかのメンバーがしゃかりきになって採集している自分のところにやってきた時も人と会えた喜びもつかの間、タイムリミットヘカウントダウンだと思うと気が急いできた。サンプリングで確認できた種数は限られていたが、在来種を確認することができた。宿泊先の口之島へ帰ってから夕食までの一時、アリ採集を兼ねて散策した。島民に出会うという質問攻めに会い、向こうからもたくさん語ってくださったので、島事情が伺えた。



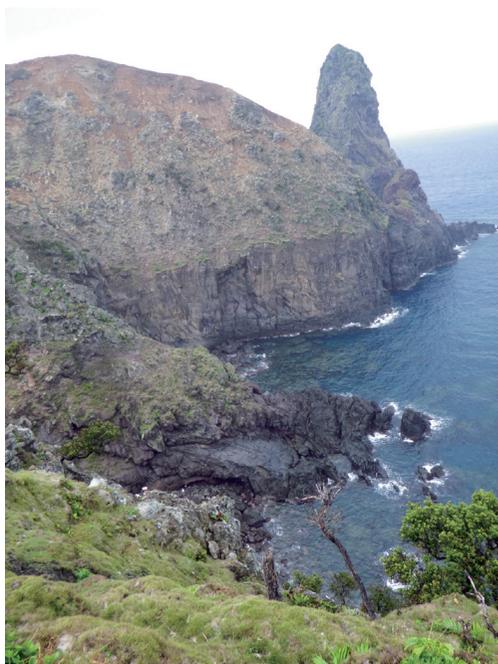
元島民により建立された「先祖の供養碑」.



集落跡から船着き場を望む.



船着き場から集落への道.



集落から立神を望む.



島を回る道路.

宿泊先での夕食時にはいろんな人の話を聞くことができる。宿のおかみさんやご主人（今回の船長）とのやりとりを聞いていると、調査団のこれまでの歴史のようなものがうかがえて楽しいものとなった。肥後姓の人と出会ったことを話すと、ここらはみんな肥後姓だと、壁に掲げられた船舶免許の肥後姓を指されて笑いとなった。

■ 2回目（2011年10月8日）

前回のサンプリングをカバーすべく島のあちこちを歩いての任意サンプリングを実施するつもりだった。今回は地図、見取り図を読むことができない自分、先へ突き進む勇気のない自分への「気づき」であった。それでも集落跡からは在来種を確認することができた。藪の奥からかすかに聞こえる音はシカだったのか、その姿をみることはできなかった。道路の真ん中でくねくねするヒルにしか出会えなかった。



離島の際放たれたヤギ。



カンザンチクが茂る。

自分たちの調査団の渡島のとすぐに、ほかの漁船がやってきた。元島民らでつくる「臥蛇会」の面々による「先祖の供養碑」建立のためのグループであった。ロープにくくりつけた供養碑やコンクリートの資材は重かっただろう。島を離れて40年目にあたるのを期に建立されるとのこと。サンプリングを終える頃には供養碑の設置も終わりに近く、調査団の全員で建立を見守ることができた。また、中学生でこの島を離れたという元臥蛇島の島民という方のお話を伺うという非常に貴重な機会を得ることもできた。思いがけずこの場に居合わせ、身が引き締まる思いを感じた。一同で建立まもない供養碑のおはらいを見守り、お参りをした。この場の重さは今でもはっきりと憶えている。思い出す度にみづるいする。どんな思いでこの島を離れていったのか。

後で知らされたのだが、2週間後、元島民による40年ぶりの渡島を試みた「臥蛇会」の船は海が荒れて接岸たがわず島を一周しながら遠くから思いをはせたとのことであった(2011年10月22日及び10月28日付けの南日本新聞に掲載されている)。

前人未踏ではなくかつて人が暮らした跡があるということを知られていても、野外調査でいざ一人で実行となると、自分はなんと無力であるか、みんなにサポートしてもらってやっとここまでできたことを思い知らされた調査だった。

最後に、この調査を企画されました鹿児島大学南西島弧地震火山観測所の皆様に心よりお礼申し上げます。